

イリノイ大学派遣留学月例報告書

今月は真冬の強烈な寒さから少しずつ寒さが和らいでいくのを実感できる月でした。月の始めには氷点下 20 度を下回る日が幾日も続き、さすがの「冬眠しないスクワロー」も冬眠してしまいました。しかし今月末の雪解けと共に、スクワローはまた活動を再開したようです。厳しい冬の寒さも峠を越え、これからいよいよ春になっていくのだと思うと心が弾みます。

さて今月の内容ですが、一先ず授業についての感想は来月に持ち越して、先々月に報告したアメリカについてのことをもう少し書き進めたいと思います。今回は宗教について触れます。

<内容>

1. なぜ宗教か
2. 宗教にカルチャーショック
3. 日本とアメリカの宗教観の違い 1 ——受動的な宗教と能動的な宗教——
4. 日本とアメリカの宗教観の違い 2 ——やさしい神様、厳しい神様——
5. まとめ

1. なぜ宗教か

私がこちらへ来て感じたカルチャーショックの一つに宗教のことがあります。私がこのカルチャーショックについてまとめておくことは、これから留学を考えている学生にとって、留学後に役に立つことだと思いましたので、報告書にまとめることにしました。

2. 宗教にカルチャーショック

私はある友人の誘いを受けて、IFG (Inter National Fellowship Group) という留学生中心のキリスト教系グループの集会に参加する機会がありました。そこでの出来事です。

まず、皆に夕食が振舞われます。そこで、席の近いもの同士が自己紹介をし、仲良くなっしていきます。皆の夕食が終わり、お腹もふくれたところで、今度は聖書についての講義が始まります。講義が一通り終わると、次は賛美歌です。日本のようにオルガンやキーボードではなく、ギターの演奏で賛美歌が歌われます。そして、最後にグループで神についての議論を交わして終わります。

流れはこれだけなのですが、このステップの一つずつに戸惑いがありました。

夕食を皆でとるところまでは良いのですが、次の講義から私は違和感を覚えました。講義の内容はもうずいぶん前のことですし、英語もまだ十分に理解できるだけの状態にありませんでしたので、よく覚えていないのですが、今でも印象に残っているのは牧師の語り口が感動的で扇動的だったと感じたことです。後に他のミサに参加する機会があって、あの語り口は個人の癖ではなくて、牧師という職業人特有の語り口であることがわかりました。日本のお寺で聞くお説教は、こちら教会で聞くお説教に比べずいぶんと淡々としている印象です。言語の違いによるのかもしれませんが、こちらのお説教は大演説です。それが良いとか悪いとかではなくて、私にはその語り口がどうも扇動的に写ってしまって気持が悪かったということです。彼の語り口に、共感し感動することを強制されているような気がして、神を信じるというバックグラウンドを持たない私には居心地がわるかったのです。

次に賛美歌です。これは教会によるのかも知れませんが、私の参加したグループの集会では、いづれもギターやドラム、キーボードなどといった楽器によって演奏される大変親しみやすい音楽でした。私がイメージしていた賛美歌は、聖歌隊によって歌われるような静かなハーモニーですが、こちらで歌われた歌はゴスペルの影響を受けているのだと思うのですが、いわゆるポップでした。このことにも私は違和感を覚えずにはいられませんでした。神をたたえる歌というより神を身近に

感じ、親しむための歌のように感じたからです。例えば、歌詞の中に「my father」という言葉が出てきたのですが、これは即ち神のことを指しています。私はクリスチャンではないので「my father」は私の父でしかありませんが、彼らにとっては父とは神のことであって、いつもやさしく見守っていてくれる存在なのです。賛美歌を歌っている間、彼らの神に対する親しみや思いが伝わってきて、神を信じるという背景を持たない私には居心地が悪かったです。

最後に、神についての議論です。このときは「あなたは神に対してどのくらい飢えているか」というテーマで議論しました。私は先にも書きましたが神を信じるという背景がないので「神に対する飢え」は全くありません。ですから、彼らにそのことを主張することはためらわれ、回答を避けました。それは、彼らの神に対する親しみや愛情といった気持ちを感じ取った後だったからだだと思います。

私はこの経験から、このような戸惑いを受けました。そして、この経験をきっかけに私自身の宗教観を見つめなおしました。それは、自分の宗教に対する考えを相手に伝えるために、自分を知る必要があると考えたからです。お互いの違いが明確になれば、その違いを尊重し合うことができそうですが、自分のことが良くわかっていないと相手を戸惑わせることになってしまうからです。以下、日本とアメリカの宗教観の大きな違いを二つに示します。

3. 日本とアメリカの宗教観の違い1 ——受動的な宗教と能動的な宗教——

私は、日本の宗教とキリスト教の最大の違いは能動的か受動的かということではないかと思いません。

キリスト教は、「やるモノ」であるし「信じるモノ」です。毎週日曜には教会へ行ってミサに参加し、聖書について議論を交し、お説教を聞きます。そして、そういうことを繰り返しながら、自己を形成していくわけですから、能動的な「やるモノ」としての宗教ではないかと思えます。

一方、我々日本人の多くは「自分は無宗教である」と思っています。例えば「あなたは宗教を信じていますか？」という質問に対して「はい」と答える人は、アメリカ人と比べてすごく少ないでしょう。実際「あなたの宗教は何か」と私が質問を受けた時、自分が特定の宗教をやっているという実感が全くなかったので、「無宗教です」と答えました。しかし、考えてみれば、私はお葬式へ参加したこともあれば、お盆もお彼岸もやっています。それに、クリスマスやバレンタインまであります。ですから、我々にとって宗教は無縁なものではありません。

では、日本人にとっての宗教とはどのようなものなのかと考えると、それは丁度文化のようなものではないかと思えます。多くの日本人にとっての宗教は特別に「やるモノ」や「信じるモノ」ではなく、ただあるものであって、能動的に積極的に関わるわけではなく、受動的に与えられる存在ではないかと。

ですから、文化として宗教を受け入れてきた日本人には、能動的に考えることを迫られる宗教に出会うと戸惑います。クリスチャンにとっても、受動的にただの文化として存在する宗教というのは理解し難いために、お互いに混乱します。無用の混乱をさけるために、自分は仏教徒であること（仏教徒であるならば）を、説明しておくのが彼らと付き合っていく上で無難なことのように思えます。または、自分にとっての宗教をきちっと説明したほうが良いでしょう。

4. 日本とアメリカの宗教観の違い2 ——やさしい神様、厳しい神様——

3. 1で、日本人にとっての宗教は文化のような存在であると説明しましたが、神がないかというとなんかそうではないように思えます。私は特別にどの宗教を信仰しているとかいうのはないのですが、日本人にとっての神という概念は、確かにあると思うのです。例えば、「神様のイメージしてください」と言えばいくつか思い浮かぶと思うのですが、その神のイメージとキリスト教での神のイメージは大きく違うように感じます。

派遣留学月例報告書（2月分）

金沢工業大学 大学院 システム設計工学専攻
蔭山 洋介

2. のミサの体験からもわかりますが、キリスト教の神様は大変にやさしく親しみのある存在です。それは、キリスト教にとっての大きなテーマが「魂の救済」であることと少なからず関係しているように思います。「救済」するためには、キリスト教の神様はとてもやさしくて友達か本当の父親のようにやさしい存在である必要があるのでしょうか。

一方、日本人のイメージする神様は厳しい存在なのではないでしょうか？少なくとも、友達のような関係ではないと思います。それは、日本人にとっての神とはすなわち自然そのものであって、「もののけ姫」に出てくる神々のような畏怖の象徴としての存在であるからではないかと思います。

そもそも、神に対するイメージが全然違うということを理解していれば、ミサに参加した時のとまどいはある程度防げるかもしれません。また、「神を信じますか？」という問いに対して、「信じません」というよりは、我々の神はこういう存在だと主張した方が、関係がうまくいくように思います。

5. まとめ

今回は、宗教についてカルチャーショックを受けた体験談から、どのようにそれら宗教と付き合いければ良いのかについて考えました。そして、自分の宗教観について整理し、自分の立場をはっきりと主張することが、彼らとうまく付き合っていく良い方法ではないかということを述べました。

ところで、宗教の問題に限らず、私はこういう人間であってあなたとはこの部分で違うということを主張し、お互いにその違いを理解しておくことは、よい人間関係を作る上で重要であることに変わりないように思います。

この経験を留学後の生活にも活かせればと思います。

以上を今月の月例報告とさせていただきます。